
プラネタリウム

神野 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラネタリウム

【Nコード】

N6257P

【作者名】

神野 桜

【あらすじ】

「20歳まで生きられない」と宣告された私

道端に咲く名もない花のように静かに咲き、静かに枯れるように生きたい

と思っていたのに、

ある出会いが私の運命を大きく変えていくことになった。

「出会い」(前書き)

この物語はすべてフィクションです。
登場する団体・個人名は実在のものとはまったくの無関係です。

「出会い」

あと何年、私はこうして生きていられるのだろうか？
人は死ぬとどこに行くのだろうか？

ただ過ぎ行く日々をたんたんと過ごしていた。
誰にも感心を示さず、誰にも気にかげられることもなく。
道端に咲く名もない花のように、誰に見られることなく、ひっそりと咲き、

静かに枯れていくように生きたいと思っていた。

彼に出会い、恋をするまでは。

例年がない寒さを記録した今年の冬、その寒さもようやくゆるみ春の気配が感じられるようになった4月のある晴れた暖かい午後、私は咲き始めた花壇の花をベンチに超腰かけて眺めていた。

「あれはなんて花？」

ふいに声をかけられ、ビックリしてあたりを見渡すと、

私の後ろに、春の暖かい日差しに負けないくらいキラキラした笑顔の男性が立っていた

「・・・マーガレット・・・」

「花好きなの？よくここに座っているのを見かけるよ。」

と言いつつ、彼は私の隣に腰かけてきた。

「・・・別に　ただちよつと考え事をするのにここがちょうどいいからだけ」

初対面の人になんでこんなに話してくるのだろうか？

不思議に思いながら彼のいでたちに目をやると、お見舞い客とはあ

きらかに違う格好をしている。

「よく見かけるってあなたもここに？」

「そうっ もう1ヶ月になる。僕は、中村太一、君は？」

名前を教える必要があるの？と一瞬迷ったが、相手が名乗ったので、こちらにも名乗らないと失礼になると思いとどまり。

「私は・・須藤」

下の名前までは教えることはないだろうと苗字だけを名乗る。

「・・・須藤さんね。僕は隣町の病院からこの病院に転院してきた。これからよろしくね。」

と言って彼は握手をするように右手を差し出す。その手は彼の笑顔には似合わない、透き通るように白く細い手だ。

そう、私の手と同じだった。

刹那、彼がこの病院に来た訳がわかったような気がして 心が沈んだが、

私には関係ないことだと割り切って、彼の握手に答えた。

「君は見たところ、怪我ってわけじゃなさそうだね。なんの病気？って聞くのは失礼か？」

私のこれまでの好意的ではない態度で察したらしい。

「そうね。なんでここにいるのかなんで他人には関係ないことよ。」
ちよっと冷たい言い方になったことに後悔しつつも本当のことだからしかたない。

「それはそうだ、失礼しました。」

といって、病人とは思えない眩しい笑顔と足取りで去っていった。

これか、彼、中村太一と私の出会いだった。

この時 私は16歳。中村太一は21歳だった。

長い入院生活ではありふれた出会い。

でも、このありふれた出会いが、私の人生に大きく影響する事になることを

この時の私はまだ知るよしもなかった。

私、須藤未来^{みく}は、ごく普通の両親のもと、年の離れた兄との2人兄妹の末っ子としてごく普通の家庭に生まれた。

普通と違う点は、生まれつき心臓に病があり、学校にはろくに行けず、家族と暮らすより病院に入院している時間の方が長い生活を送ってきたとこだ。

生後すぐに「命に関わる持病があるため普通の生活が送れない」と宣告を受けた私のために「明るい未来が続きますように」という願いを込めて「未来（みく）」と両親が名付けたようだ。

長い入院生活の中、たくさんの人に出会い、そして別れていく。退院していく人、治療のかいなく亡くなる人、さまざまな別れがある。

出会いと同時にその先には必ずどちらかの別れが待っている。私自身がいなくなるという場合も含めて。

わかっていてもやはり別れはつらい。残される側のつらさをいやってほど知っている。

逆に自分が消えた後、残された人達の悲しみも痛いほど判る。

そういう生活の中、いつしか、出会った人には、心を開かずに表面だけの付き合いをしてきた。

それが当然であり、私には必然であった。そうやって生きていた。

「未来ちゃん、もう中村くんに会った？　今じゃ　彼は病棟のアイドルよお」

彼と出会って半月がたった頃、20代前半頃のショートヘアのナ-

スがはずんだ声で私に話しかけてきた。

彼女、村上浩美さんは私と年が近いこともあり、よく私の病室に来て二人でおしゃべりをしたりしている。

あまりにもおしゃべりをしすぎて、仕事を忘れてしまい看護士長の麻木さんに怒られることもしばしばあるが頼るになるお姉さんって感じた。

「うん、この前会ったよ、中庭の花壇のところで」

抑揚のない声で答える。

「な〜んだ、もう会っていたのね。で、どう？」

何かを期待しているような目で浩美さんは訪ねてきた。

「どうって・・・ 彼の手を見て、きつと私と似たような病気だろうなあって思った。どっちがここを先に去っていくかなあ？」
ちよっとおどけて言う。

「何？その感想。相変わらずクールなものねえ。私的にはそういう未来ちゃん好きだけど、ナースの立場としては困ったものよ。たまにはその他人とのドライな関係を壊して付き合ってみたら？」

浩美さんは、呆れ顔で手を腰に当てて説教するように言う。

「いいよ。これが一番いい方法だって、16年生きてきて悟ったのよ。まあ気が向いたら話してみるけど、それはきつとないな。あんなヘラヘラした人もともと苦手だし。」

私は話題を変えるために、わざと大声で

「あつ そんなことより、そろそろ戻らないとまた麻木さんに怒られるよ」

と時計を指差した。

「あつ いけない、これから新しい入院患者の出迎えだった！！
じゃあまたね。」

そう言って 浩美さんはバタバタと病室を出て行った。

年が近いうえに、ナースという仕事柄もあってか、彼女は、患者の^私考えていること、思っていることをよく知っていた。また、そのサバサバした彼女の性格も伴って

彼女にはなんでも話せていた。

浩美さんが言っていた通り、中村太一は、ここに来て1・2ヶ月で病棟、いや病院中の有名人になっていた、なんでも、自分の病室にはほとんどいないで、病院内のいろんな病室を渡りめぐり、その人懐こい性格で確実にファンを増やしているようだった。

私はどうもそういうタイプが苦手で、彼のいる所には近づかないようになり、

しだいに病室に閉じこもるようになった。

そんなことをやっていたためお気に入りのあのベンチ、彼と初めて会った花壇にも行けなくなっていた。

風薫る心地よい季節のある日、あまりの気持ちいい天気だったので、

お気に入りの本を手に取り、つついあの中庭の花壇前のベンチで読書をしていた時、彼に

再会してしまった。

「こんにちは、須藤さん　ようやく会えた。」

本を読むのに夢中になっていたため、彼が近くにいたことに、声をかけられるまでまったく気づかなかった。

「下の名前　未来ちゃんっていうだね？　教えてもらえなかったから看護師さんに聞いちゃった」

彼はこの前と同じように私の隣に腰かけた。

「なんか僕、嫌われているのかな？　避けられてように感じるのは気のせい？」

そう言って、彼が顔を私に近づいてくる。

ここで会うなんてって最悪と悔やんだ気持ちを見透かされたような気がして、顔をのけぞる。

「別に・・・」

なんて言っているのかわからず言葉につまる。

そうしているうちにも彼の顔が目の前まで来ている。

彼の大きなきれいな瞳に吸い込まれそうになり、あわてて顔をそらす。

「ほらやっぱり、僕なんか気に障ることしかな？」

急に顔をそらしたために疑われてしまった。

別に嫌いってわけではないが、なんと返せばいいかわからずに沈黙が続く。

「・・・中村くん」

神の助けのごとく、遠くで彼を呼ぶ声が聞こえた。

「呼ばれているよ」

私は冷静をよそおい、駆け足で近づいてくる浩美さんを指差した。

「どうしたんですか？」

私の隣に腰かけたまま、駆けてきた浩美さんに彼が答える。

私は、彼と2人でいる所を浩美さんに見られたということが、なんとなく恥ずかしくなり、俯きたい衝動にかられた。

「中村君！ 回診の時間よ、病室に戻って」

「えっ もう？ すぐ戻ります！」

そう浩美さんに伝えて歩き出した彼は振り向き、

「せっかく会えたのに残念。またね。」

と大きく腕を振って去っていく。

そんな彼の後ろ姿を見つめながら、私は今までに感じた事のない感情が湧き上がってくることに気付いた。

これが何？

「ふーん」

気付くと浩美さんがあごに手をあてている

「何？」

何か言いたけに私を見つめる浩美さんの表情が気になり、彼に対し

てさっき感じた感情を考えることをやめた。

「未来ちゃんも回診あるから病室にもどってね。」

浩美さんは何かを悟ったように見えたが、私に言うことはせずに話を変えた。

そんな浩美さんの態度も気になったが、せっかくの読書が邪魔されてがっかりした気持ちを上周り、とぼとぼと病室にむかった。

しばらくたったある夜、私の彼に対する印象を大きく変える出来事が起こった。

「嵐の夜」

その日は、珍しく台風が梅雨前の日本列島に接近していて、雨はまだ振っていないかったが、

生暖かい風が吹いてとても気味の悪い夜だった。

虫の知らせとでもいうのか、私はなかなか寝つけずにいたため、病棟内をあてもなく歩いていた。

消灯後の病棟は、シーン静まりかえっており、呼吸器等の機械音のなか、窓の外で風が木々の葉を揺らす音が時折聞こえるだけであつた。

眠れぬ夜、私はよくこうやって病棟内を歩くことがあつた。

こんな時間に出歩いていることが見つかるどこつてり怒られてしまうため、毎回ナースステーションを通過する時は隠れて通るようにしている。

その日もいつものように見つからないように通っていたら、

「605号室のあかりちゃんが急変しました」

と若いナースがかけてきた。

「すぐ処置するかた用意して、あとドクターに連絡も」

トクターに電話をして、医療器具を載せたカートを押して若いナースがかけて行った。

急に慌しくなる病棟。

あかりちゃんは、6歳の長い髪がかわいい女の子だ。

先天性の病気で、彼女もまた入院生活が長い、そのためよく私とおりがみなどでして遊んでいた子だ。

気になり、こっそりあかりちゃんの病室前に来ると、緊迫した空気の中、駆けつけたドクターの処理が行われていた。私は呆然とその

光景を見つめていた。

ふと、そばに誰かの気配を感じ我に返った。

振り向くと中村太一が私と同じように病室の中を見つめていた。

視線に気付いて彼は私を一瞥したあと、目線をまた病室内に戻した。私たちは何も言わずにただ静かに病室の中を見つめているだけだった。

「ピー」

心臓がもう鼓動していないことを告げる機械音が鳴り、担当医師が心臓マッサージを開始する。数十分後、真夜中の医師たちの懸命な処置も虚しく、あかりちゃんは今へと旅立っていった。

病院の知らせで駆けつけた母親が、ベッドに横たわる我が子に抱きついて泣きながら、娘の名前を繰り返し呼んでいた。

ずっとここにいてもしかたないと感じ、私たちはその場を後にした。

お互いなんとなく1人になるのが怖かったのか、待合室の椅子に並んで腰をかけて

何か言葉を発するわけでもなく、黙って前だけを見つづけた。しばらくして、

「まだやりたいこといろいろあっただろうに・・・」

と普段の彼からは想像もつかない、重く暗い声が聞こえた

私は何も言えず、だまって聞いていた。

「世の中って不公平だなあ。人を傷付けたり、騙したりと悪いことをしているヤツはのうのうと生きていて、何ら悪いことをしていないあんな幼い子どもが死ぬなんて・・・」

悔しそうに呟き、肩を震わせて静かに泣いていた。

私の知っているいつもへらへらと能天気な彼はそこにはいなかった。

何と声をかけていいかわからずに戸惑っていた私は、彼の手をそっと握った、

彼もまた、それがまるで自然なことであるかのように私の手を静かに受け止めた。

どのくらいそういていたかはわからないが、しだいに外が明るくなり始めた頃、

椅子から立ち上がり、無言のままそれぞれの病室に戻った。

病室に戻り、静かに扉を閉めたところで私は動けなくなった。

こぼれ落ちる涙をぬぐうことなく声を殺して泣いた。

いつしか窓の外は、私の心を現したかのような大粒の雨が降っていた。

この夜から彼の印象が変わった。

ヘラヘラしているだけの何も考えてない能天気な人と思っていたが、ちゃんと自分の病氣・死について考えていることを垣間見た。

不思議と彼への嫌悪感が消えていった。

数日後、いつものように花壇そばのベンチで本と読んでいると

彼が声をかけてきた。

「この前はみっともないところをお見せしてしまって申し訳ない。」

こういうときなんと言えいいのかかわかず、笑顔で首をふった。

彼は私の隣に腰をおとし、何の違和感もなく話をした

2人並んでとりともめのない話をしていたとき。

ふと、彼が私の膝の上の星の本を見て

「星って昼間も輝いているんだよね。」

彼は静かに話し出した。

「太陽の光が眩しくて肉眼では見えないけれど、今もこの空で輝いている」

そう言って空を見上げている、私もつられて空を見上げた。

「そう言われるとたくさんの星が見えているような気がする」

私がそう言うと、彼は嬉しそうに私を見て満面の笑みで返した。

「大事なものは信じることだね」

青い空の向こうに無限に広がる宇宙の星々も暖かく笑ったような気がした。

私と太一が仲良くなるのにそんなに時間は必要なかった。

読者が好きで、天体に興味があって、音楽の趣味までも同じだった。一緒にいるのが当たり前になった。

浩美さんは、何か予感していたような顔をして私たちを見ていた。

「夕焼けの街並み」

梅雨がようやく明け、夏本番となった7月中旬

花壇のベンチで1人読書をしている時、1人の女性が近づいてきた。

「あのー すみません。あなたが未来さんですか？」

「そうですが、あなたは・・・もしかしてあかりちゃんのこと・・・」
声をかけてきたのは、亡くなったあかりちゃんの母親だった。

「はい、あかりの母親です。あかりがいろいろとお世話になった
ようで、ありがとうございます。」

と彼女は深々と頭を下げた。

「いいえ、どうでもない。」

私も立ち上がって一緒になって頭を下げた。

「あの子の49日も終り、主人の地元に戻って2人で過ごすことに
しました。」

と彼女が振り返ると遠くにご主人らしき男性が私に会釈をした。

「今日は、引越し前にお世話になった病院に挨拶にと思って。未来さ
んがこちらにいと伺ったもので、お邪魔してごめんなさいね。」
と静かに微笑んだ。

「主人の実家の家業を継ぐことにしたんです。何も無いところだけ
ど、自然だけはいっぱいある所で、よかったら遊びに来てくださ
いね。」

そう言い残し、あかりちゃんのご両親は去っていった。

「この町は、娘の思い出が多すぎるから田舎に引っ越すらしいよ」
いつの間にか私の側に立っていた太一が教えてくれた。

「そうだよね・・・新しいところで元気に暮らしてほしいな」
残される側の辛さを痛感し、ご両親の新しい未来が健やかであるこ
とを願う。

そして、そんな2人が自身の両親と重なった。

「こんな所に帽子もかぶらずいたら、熱中症になるよ。病室に戻ろう」

暗くなった私に気付いたのが、

しんみりとなった空気を吹き飛ばすように太一が明るくそう言っ、私を室内へと促した。

世間が夏休みになり、病棟内でも一時退院をする患者が多くなる、私も一時退院とまではないが、3日間の外泊許可がでたので、お正月以来の帰省をすることにした。

久しぶりの外出だったため、母の迎えを断り電車で帰ることにした。病室を出ようとしたとき、扉をノックする音がして、

扉を開けると、いつもの入院スタイルとは違い、今時のファッションに身をつづんだ太一が立っていた。

「いつもと違うからビックリした」

「かっこいいでしょう？」

いつもとは見違えるようにかっこいい太一を目の当たりにして、ドキッとしたが、

「普通かな？」

と強がってみせた。

それぞれの荷物を持って廊下を歩いていると、浩美さんの先輩ナース、明日香さんとすれ違い、

「あらっこれから2人でデート？」

と私たちをからかってきた。なんとなく恥ずかしくなり俯く私とは対象的に。

「そうなんです。でもみんなには内緒ですよ」

と人差し指を口の前に立てておどける太一。

「大丈夫、私口堅いから 気をつけて行ってらっしゃい」

と彼女に見送られた。

「絶対、あの人みんなにおもしろおかしく話すよ。どうしよう」
私が困り顔で言う。

「いいじゃない。本当にデートに誘うつもりだったから」

あっさりと言う太一を私は驚いて見上げた。

太一は、私の前に立ち。

「お嬢さん 僕とデーとしてくれませんか？」

と、英国紳士が社交界で女性をダンスに誘うように、足を交差させ、左手を腰後ろに、右手をおなかの前に持つてきてお辞儀を試みた。

私はなんだか可笑しくなり。

「ええ 喜んで」

と右手を太一の目の前に出した。その手を太一は優しく握り、2人で並んで歩いた。

病院内で手を繋いで歩くことに抵抗と戸惑いがあったが、離すのが寂しい気がして、そのまま歩いた。

私の心臓は、発作の時はぜんぜん違った高鳴りをしていて、太一に聞こえないようにするのが大変だった。

2人で初めての外出はとても楽しかった。

病院の前で街へ向かうバスに乗り、駅前の繁華街のファストフード店でランチをして、

繁華街を歩いた。

夏休みになった学生などで人通りが多かったため、私と太一はずっと手を繋いだままだった。

久しぶりの街は、まったく変わった所などないのに、なぜだか今日がキラキラと輝いて見えた。

デート最後に街の夜景が見渡せる、この街では絶好のデートスポット

トとなっている駅ビルの屋上に上がった。

辺りは、若いカップルが各々の世界に浸っていた。

そんなカップルだらけの中、

私と太一は、夕焼けで赤く染まり出した景色を見下ろしていた。

「あのさ 大事な話があるんだ」

と太一が真面目な顔になって言った。

普段見ることのない太一の緊張した顔つきに驚き

「・・・何？」

私は喉がつまり声を出すのもやっとだった。太一は、空を見ながら。

「あかりちゃんが亡きになったあの夜、覚えている？ あの時泣いていた僕の手を未来ちゃんはまだまって握ってくれていたんだよね。その優しさが嬉しかった。それから一緒に過ごす時間が増えて、いろんな話をしたよね。そうしているうちにね。気が付いたことがあるんだ」

向き直り、まっすぐ私の目を見て

「君のことが好きです。僕と付き合ってください。」

と力強く告げた。

私はただ、ただ驚いていると

「急でビックリするよね。いまずぐに返事をもらおうとは思ってない、ただ、今の気持ちを伝えただけだから、でも、ゆっくりでいいから考えてくれると嬉しい。答えが見つかったら教えてほしい。・・・たとえばNOであっても」

最後の方は小さい声になり聞き取るのがやっとだった。

私はパニックになりそうになるのを押さえて、コクンとうなずくのがやっとだった。

「うん、ありがとう。日も暮れたことだしそろそろ帰ろうか？」

見れ太陽は完全に沈み、辺りは街頭でほんのりと明るくなっていた。

電車の方向が違うため 改札口で別れた。

電車に乗り、扉にもたれて流れる景色を見ながら、太一の言った「君のことが好き」という声がずっと耳から離れなかった。

家に着き、嬉しそうな母に出迎えられた。

久しぶりに帰省で母はいろいろ話をしてしたが、私はずっと上の空だった。

「ちょっと疲れたから」

と、早々と自室に戻り、バルコニーから空を見ながら、太一のことを考えていた。

部屋の外でノックをする音が聞こえた。

ドアを開けると兄が立っていた。

私と10歳も年が離れた兄は 昔から音楽が好きで今やシンガーソングライター（歌手）になっている。私にとって自慢の兄である。私が帰ってきたことを知り、家を出て一人暮らししている兄が私に会いにわざわざ来てくれたのがた、しかし、肝心の私がリビングにいないため2階に上がってきたようだった。

「きついのか？」

心配そうに覗き込も兄に私は首をふった。

「なんだ？」

私の体調が悪いわけではないということがわかると安心したのが、「じゃあただの引きこもりか？下にいなかったから、心配して様子を見にくれば、せっかく帰ってきたのになんで引きこもりしているんだ？ 母さんも心配していたぞ」

と言って私の頭を軽くただいて、部屋に入ってきた。

兄を招きいれながら、

「ちょっと考えごととしていて・・・ お母さん心配していた？」

「うん、俺に様子を見てきて欲しいって、また小難しいことを考えていたんだらう？ あんま母さんを心配させるなよ。今日ぐらいは

母さんと一緒にいてやれ、悩みなら俺が聞いてやるから　いつでも言ってこいよ」

兄は年の離している私にいつも気を使ってくれて、何かあるところして声をかけてくれて、いろんな相談にのってくれた。

「ありがとう。」

「じゃあ　おやじも帰ってくる頃だし、下に行くぞ」

私は兄と一緒にリビングに行った。ちょうど父が帰ってきた時で、私へとお土産のケーキを手にかけていた。

4人で夕食を取り、父が買ってきたケーキを食べて、久しぶりの一家団欒を楽しんだ。

この夏も家族と過ごせる時間は短かったが、兄を荷物持ちに任命して、母親と最近できた大型ショッピングモールで思いっきりショッピングをし、父が休みの日は、4人で近くの高原までドライブに行ったりして過ごした。

3日間はあるというまで、

病院に帰る前日、夕食後私は自室に戻り、ベランダから昇り始めた満月を見ていた。

明日には病院に帰る。彼と再会することになる。私はどうすればいいのか悩んでいた。

ノックをする音がして兄が入ってきた。

「どうした？病院に帰るからちょっとセンチにでもなっているのか？」

兄が私の隣に立つ。

「そういうわけじゃないよ　だた、ちょっと考えてこととしていただけ。」

兄が心配そうに私を見ていたから、思い切って相談することにした。太一のこと、太一と会って感じた気持ち。告白されたこと。

兄は静かに聞いてくれた。

「これまで男性を見てかっこのいいなあって思うことはあったし。その人にいい所をみせたいとも思ったことはある、それが「恋」って思っていたけれど、彼に対してはそれらとは違う感情がある。嫌とかじゃなくて、むしろ好意的な感じ？　これって何？」

兄には包み隠さずに何でも話せるため正直な気持ちを打ち明けた。私の話を聞いていた兄はちょっと驚いた顔をしたが、その後嬉しそうに目じりをさけて、

私の頭を幼い子にするように「いい子いい子」となでた。

「なに？」

兄の手をはらいつつ言った。

「いや、おまえもとうとう知ったか。うん。うん。大きくなったなあ・・・。」

あには腕を組みうなずいている。

「意味わかんない。それより、私の話し真剣に聞いてよ。明日には彼に会うことになるのだから、深刻なの！！」

真剣な面持ちで訴える私に

「うーん。そうだな。おれが言えるのは、そのままの正直な気持ちを伝えればいいってことだけだ。」

兄はそう言って、また私の頭をなで、部屋を後にした。

残された私は釈然としない気持ちで空に浮かぶ満月を見上げた。

「月夜の告白」

翌日、母の運転する車で病院に向かった。

太一に会うのが怖くて、このまま病院に着かないでいてという虚しい願いをそとに、

あつという間に病院に着き、母に付き添われて病棟に戻ってきた。

母は、

「お母さんはお世話になっているみなさんにご挨拶して帰るからね」といってとナースステーションに寄って帰っていった。

1人病室に残った私は、昨夜兄が言っていた言葉を思い返して考えた。

そうこうしているうちに食事の時間になり、食堂に向かっている時に、うしろから

「未来お姉ちゃん」

と声が聞こえた。振り向くと顔見知りの男の子が私に駆け寄ってきた。

「健太くん　こんばんは、どうしたの？」

私は健太くんと同じ目の高さになるようにしゃがんで声をかけた。

「太一兄ちゃんにこれを未来お姉ちゃんに渡してって頼まれたの」

彼は、息をはずませながら私の前に1つの封筒を差し出した。

「私に？」

と私は自分を指差すと、

「うん。太一お兄ちゃんがぼくにじゅうようにんむだって」

そう言って健太くんが嬉しいそうにしているので、受けとらないわけにもいかず、

「重要任務ご苦労様。確かに受け取りました。ありがとう」

と小さな手から封筒を受け取った。

健太くんは、任務完了が嬉しいのか、軽やかな足取りでそのまま食

堂に入っていた。

中身が気になったが、部屋でゆっくり見た方がいいと思い、羽織っていたカーディガンのポケットにいれて食堂に向かった。

夕食後、部屋に戻り、受け取った封筒をあけると1枚の便箋が入っていた。

『せっかくの帰省前にあんなことを言ってごめんね。

君を困らせるつもりはなかった。ただ、どうしても僕の気持ちを伝えたくて、

未来ちゃんの考えがまとまるまでは、会わないようにするね。ゆっくり考えてください。』

繊細な文字で書いてあった。

『会わないようにする』の文字に胸が苦しくなった。

このままでは、いつまでたっても彼に会えないそう考えると苦しい。

「そのまま正直な気持ちを伝えればいい」と兄の助言が脳裏をよぎった。

ふと、彼に会えないよりはありのままの気持ちをぶつけるほうがいいのでは？という気持ちが強くなり、今の気持ちを伝えることにした。

私も手紙にしようかと思ったが、

書いては破り、書いてはやぶりの繰り返し、

うまく書くことができず、直接会いに行くことにしたが、

手紙を書くことに時間をかけてしまい消灯後になってしまった。

彼の病室の前に行き、ノックをしようとしたときに扉が開いた。

ノックをするポーズで止まっていた私に

「影が見えたから、夜這い？」

緊張した面持ちの私への気遣いなのか、いつものようにおどける彼が立っていた。

「ちょっといいかな？」

私が来た意味がわかったのか、彼は真面目な表情になり、

「うん せっかくだから屋上行こうか？」

と病室を出て、消灯後の廊下を会話もなく2人で歩いた。

屋上に出で、ペンチに腰をかけた。

十六夜の月の光が辺りを照らして神秘的な雰囲気だった。

太一は私が話し出すのをそっと待っていてくれた。

「お手紙ありがとう・・・」

「・・・うん。」

会話が続かない。

空を見上げると、昨日よりちょっとかけた月が優しく輝いていた。

「あのね、なんて言えばいいのか、自分の気持ちをうまく現す言葉が見つからないし、ちょっと長くなると思うけれど最後まで聞িয়েくれる？」

太一は、こくりとうなずいた。

「7・8歳の時にね、自分が20歳までは生きられないって両親と先生が話しているのを聞いたんだ。『未来』^{みらい}って字の名前なのに、

『未来』がないなんて変でしょう？。

で、入院生活が長いとさ、たくさんの『死』に直面するわけ、人が死ぬってことがどんなことなのか、死んだら人にはもう会えないってことも、小さい頃から理解できた、そうして

いつしか人とは深く関わらないように。私がいなくなった時、誰も悲しい思いをしないですむようになって生きてきた。」

太一は何も言わず私の話を聞いてくれているようだから、私は彼の顔を見ることができず、

前を見て話を続けた。

「だから男の子と付き合うなんて考えたことがなかった。自分にはありえないって思っていた・・・でも、」

「うん わかった。困らせてごめんね。・・・でも、これから今までどおりいいお友達として付き合って。」

彼は急に立ち上がり背を向け歩き出した。

「えっ！？ ちょっと待って、どこ行くの？」

慌てて追いかける私に、振り向きもせずに太一が答える。

「どんな答えでも聞くつもりでいたけれど、やっぱり出来ない。未来ちゃんから『ごめんない』って言われるのが怖い。僕ってへたれだよな・・・」

そういう太一はなんだか小さく見えた。

「何で『ごめんない』って私が言う・・・」

と言いかけて私は、太一が勘違いしていることに気付いた。

「とくかく、最後まで聞くって約束いたのだから 座って聞いて」
太一の腕を掴み、さっき座っていたベンチまで連れてくる。

「えーっと、どこまで話したんだっけ？ もう忘れたから、結論だけ言うね。」

観念したように下を俯き、私の次の言葉をじっと待っている太一がすごく愛しく見えた。

「いろいろ考えた結果、私は太一くんと一緒にいたいって気持ちに気付いた。20歳まで生きられないって言われたから。きつといつか太一君を悲しませることになると思う。でも、私は太一君と一緒ににいたい。こんな私でもいい？」

太一は、きょとんとしていたが、私の言ったことを理解したらしく「つまり、OKってこと？」

と私の顔を覗き込みながら聞いた。

「はい・・・」

私は恥ずかしくなり俯いた。

「すごい神妙な顔つきだったから、てっきりNOって言われると思

った」

脱力したように太一はベンチに背もたる。

「よかった。OKならOKって早く言ってよ。」

「私でいいの？いつか死ぬんだよ？」

逆に私が不安になり聞きかえず。

「人はみんな遅かれ早かれ死ぬものさ。健康にしている人だって、明日交通事故で死ぬかもしれないし、人生なんて『一寸先は闇』ってやつだよ。だからそんなことは問題ではないよ」

太一が明るく「問題ではない」というと、今まで悩んでいたことが嘘のうに軽くなった。

「でも、みんなに知られると恥ずかしいから内緒にしてくれる？」
これまでの私のキャラから考えるととても恥ずかしい。

「確かにそうだね。じゃあ2人だけの秘密だね いいね、秘密って。」

「えーっと これからもよろしくお願いします。」

気まずい雰囲気を読み取ったために、お辞儀をする私に

「なんかこういうあいさつって変な気もするけれど、こちらこそよろしくお願いします。」

と太一もお辞儀をした。

「今日が僕らの付き合った記念の日だね。」

太一はいままで見たことないような最高の笑顔で私に言った。

その笑顔を見て、私の心臓は、きゅんっとなった。

付きあうことにしたといえ、入院しているため、

これまでと変わらずに、病室や中庭で話をしたりしているだけだった。

ただ、お互いの呼び名がわかったという点が以前と違った。

しかし、その些細な変化にいち早く浩美さんが気付いた。

ある日の朝、病室に來た浩美さんが、

「ねえ、未来ちゃんと太一君って何かあった？」

と私の脈を計りながら唐突に言った。

「えっ・・・」

急なことで言葉が見つからずにいると、

「あっ　脈が速くなった、計りなおしだね。で、どうなの？」

と、私の腕を離して言った。

「いや・・・」

私の表情を見て悟ったらしく、

「やっぱり？　ふうん　あの未来ちゃんが・・・　へえ　まあ、

いずれはって思っていたからね。そうかついにね。よかった、よかった。」

「何かやっぱりなの？」

恥ずかしくなり下を向き、声を振り絞って聞いた。

「最初は、太一君のこと避けていたでしょう？　それがいつからか、急に仲良くなったから、

ひよっとすると彼のことが好きなんじゃないかなって思っていたんだ。まあ、未来ちゃん自身は無自覚だったみたいだから、自分で気付くまで何も言わなかったけど、ようやく自覚したんだ。」

浩美さんの言葉にビクリして顔を挙げると　目が合ってしまった　赤面してしまう。

「いいことだと思うよ。年頃の女の子があんなにクールなのが変だったのよね。顔を赤くして照れている今の未来ちゃんの方がずっといいよ。」

「お願いこの事は、みんなには言わないで」

手を合わせてお願いする私に

「えっどっしよっかな？」

とおどけて見せる浩美さんは

「そのかわり、何かあったら私にはすぐに言うこと。あと、消灯は

守ること。それを約束してくれるなら、内緒にしていあげるといい？」

と、一瞬険しい表情をする。

「太一君には、私が知っていることは内緒ね。その方がおもしろいから」

といたずらっぽくウィンクすると、

「さて、仕事、仕事、脈が落ち着いたかな？」

ナースの顔に戻り、私の手首の脈を確認する浩美さんに私は苦笑した。

「星空の約束」

浩美さんには『消灯は守る』と約束したが、消灯後の病室を向け出して屋上のベンチで空を見るのが、私たちの定番デートだった。

「私、満天の星空がみてみたいな」
何気なく呟いた私に。

「星見高原っていう天文台のある高原知っている？　ここからちょっと遠いけれど、電車とバスを乗りついて行けるから、そこに一緒に行こうか？　泊りがけじゃないと行けないけれど。どう？」

「高原の天文台かあ　素敵だね。行きたい。でも泊りがけとなると外泊許可でるかな？」

「未来ちゃんも吉村先生だったよね？　なんとかお願いすれば大丈夫だよ。いつ行こうか？　星を見るなら新月の夜がいいから。次の新月の日にしようか？　あとで調べておくね。」

こうして、思いつきで私たちの始めての旅行がきまった。

旅行などの計画というものはとても楽しいのもで、月齢を調べ、宿泊先を手配して、高原までの交通手段を調べたりと、2人で毎日あーでもない、こうでもないといワイワイ計画を立てた。

最大の難関は、担当の吉村医師からの外泊許可だったが、普段優良患者な私はあっさり許可がもらえた。太一は若干いやな顔をされたようだ。

まあなんとか無事許可がおりた。

2人で出かけることには、吉村先生と浩美さんだけの秘密にしてもらい、

当日を迎えた。

星見高原までは、電車を2回乗り継ぎ、その後バスに乗って向かった。

途中の駅で駅弁を買い、車窓からの景色を眺めつつお弁当を味わった。

バスを降りてからは、ちょっとした坂を登るのだが、学校行事の代表「遠足」に行ったことない私たちにはとても新鮮だった。

広葉樹林の林を抜けると辺りが一気に開けて、秋の風がほほに心地よくあたった。

「素敵！！　ここならたくさん星が見えそう。」

息は弾ませて振り向くと。

「ここに来て正解だったでしょう」

と太一が自慢気にVサインをする。

高原に唯一あるホテルが今日の宿泊先だ。

天文台と繋がっていて、宿泊客は夜の天文台での観測ができるのがこのホテルのウリになっている。

旅にはトラブルがつきものというが、これまで順調だった私たちの旅行にもアクシデントが発生した。

ホテルをチェックインする時。

「えっお部屋が1つしかない？　ちゃんとシングル2部屋で予約したはずですよ。」

フロントに抗議する太一。

「申し訳ございません。こちらの不手際でして、あいにく本日はすべて満室になっておりまして・・・本当に申し訳ありません。」
と頭を下げられた。

ちゃんと　シングル2部屋と予約をしたのに、1部屋しか押さえら

れてなかったのだ。困り果てた太一に私は、

「太一、仕方ないよ、ここしか泊る所ないんだし。」
となだめつつ、

「この1室は、ツインですよね？」

とフロントの人に念のために確認をする。

「ツインなら問題ないし、ねっ？ここに泊ろうよ。」

太一をのけ者にして、

「この部屋でいいです。」そのかわりサービスしてもらえますよね？」

とフロントの人の話を進める。

「はい、それはもちろんでございます。お部屋のお代は1名様分のみでけっこうです」

「じゃあ 交渉正立でということをお願いします。」

太一は不満気な顔をしていたが、私はさっさと手続きをすませて、部屋に案内してもらうことにした。

係の人が一通り部屋の説明をして出て行ってすぐに太一が開口一番に「部屋を1つしか押さえてないってありません。てか一緒に部屋に泊るなんで問題だよ」

不機嫌に言う。

「今日は他に部屋が空いてないっていうからしかたないって、夜、天文台利用できるのでだからここに泊りたかったし、その洗面室で着替えれば何も問題ないでしょう？」

「いや、そういうことじゃなくて・・・」

歯切れの割る言い方になる太一。、

「何か問題でも？」

と首を傾げる私、太一は大きくため息をつく。

「未来がいいっていうならもういいよ・・・」

と諦めたようにつぶやく

そんな太一を無視して私はベランダに出た。

ベランダからの見晴らしはとても素晴らしかった。

遙か遠くまで見渡せ、空も星を観測するには十分とっていいほど開けていた。

「さすが星見高原にあるホテルね。ベランダからも空が見られるようになってる。」

はしゃぐ私の後について、ベランダに出た太一も一緒に空を見上げる。

「こういうところになると天体望遠鏡がほしいうちだね」

空を見たまま私がつぶやく。

「天体望遠鏡なら病院の屋上からも結構星見えるから。買っちゃおう？」

「いいね。買おう。帰りにちょっと寄り道して買いに行こう!!」
顔を見合わせて微笑む。

また、楽しい予定ができワクワクしてきた。

初めての遠出・夜の天体観測と楽しいことがたくさんあり、ちょっと興奮していた私は、

夕食後疲れが出たのか 気分が悪くなりベッドに横になった。

「未来、大丈夫？」

ベットサイドに膝をつき私の顔を覗き込む太一は青ざめていた。

「大丈夫。ちょっと疲れただけ、しばらくこうしていれば復活するから心配しないで、それよりも太一は大丈夫？」

いつもの環境とは違う場所にきて、つつい興奮して無理をしてしまった。

そんな私に体が抗議するかのよう症状が表れる。

こういうとき自分は普通ではないと痛感する。

「せっかく来たのに天文台で星を見ないで帰るのは絶対に嫌、しばらくしたら動けるようになるから、天文台に行こうね。」

心配そうな太一の目を見つめて私は明るく言う。

「無理しなくていいよ。今日見られなければ、また来ればいいんだから」

そうはいうが、

太一も私もよく知っていた、私たちには次がないかもしれないことを。

だからこの時を大切にしたいと思う。このくらいで寝込んでいられない。

強い気持ちに通じたのか、30分ほど横になっていると体がだいぶ楽になってきた。

太一もしばらく隣のベッドで休んでいたが、私が起き出したのに気付き側にやってきた。

「もう大丈夫だから、天文台に行こう。でもその前に髪をセットしなおしていい？」

太一の手をかり立ち上がり、洗面台へと向かった。

鏡の前に立つ、いつも以上に血の気の引いた青白い顔が映っていた。鏡に映る自分の後ろに、死に神が大きな鎌を持って、今にも私に向かって振る下ろそうとしている映像が脳裏に過ぎった。

「未来、大丈夫？」

扉をノックする音と太一の声で現実に戻り引き返る。

「はーい 今行く。」

努めて明るい声で返事をして出た。

まだ、死ねない、死にたくない

ちょっと遅れて天文台に向かったためか、幸運なことに人はまばらになっていて、

ゆっくり天体観測ができた。

大きな望遠鏡でみる月はクレーターでゴツゴツしていて、地上から見る月とはまったく別の物にしか見えない。

私の好きな星「昴」は肉眼ではせいぜい5〜7個しか見えないが、ここでは数十個もの青白い星の団体に見え圧巻だった。

一通り天文台での観測を終えて部屋に戻る、

先に入浴を済ませてバルコニーで星を見ると、お風呂上がりの太一が隣にやってきた。

「空に輝く星はこの地球から何万キロも離れている。おおいぬ座の1等星シリウスですら 8 光年、光の速さで8年かかる程の距離にある」

私は静かに太一の声に耳を傾けた。

「さっき見た昴は地球から400光年だったかな？ 離れた場所にある星だから、星を出発した光が、400年の時をかけてこの地球に届く、言い換えれば、今見ている昴は、400年前の姿ってことになる」

さっきみた昴の映像を思い出しながら聞いていた。

「ってことは、もしかすると星を出発した光がこの地球に届く前に、その星が消滅してなくなっているってこともありえるよね？」

恒星の寿命はその星の質重に価すると以前本で読んだことがある。

太陽は約100億年の寿命、あと約50億年後で消滅すると計算されている。

つまり、今見ているこの満天の星の中には、現時点ではもうその場にばない星だってあるってことになる。

「本当は存在していない星を僕らが今見ている、地球では今見えているからその星は存在していることになる。地球上の僕らが、その星

を見て、そこにその星があると認知している限りはその星は存在し
つつける。」

太一が何を言いたいのかわからなくなり、彼の横顔を見上げた。

「星と同じように、人も覚えている人がいる限りは、消えないと思
うんだ。よく思い出の中に生きるとか、心の中に生きているって
言うじゃん。あれは、そういうことなんじゃないかな？」

そう言って太一と私の目が合う。

「未来は自分がいつかなくなることで、自分がなくなった跡のこ
とを恐れているよね？」

声が出せずにこくりとうなずくのが精一杯だ。

「こうやって旅行したこと、病院の屋上でのデート、交わした言葉
のすべて覚えている。忘れることはない。」

太一の瞳が私の瞳を捕らえて私は目をそらすことができない。

「だから人との関わりを怖がることはないよ。むしろたくさんの人
に覚えてもらいようにしないと。自分がいなくなった後のことな
んで未来が考えなくていい。そんなこととしていたら身がもたない。
せつかくの人生好きなようにしなよ。」

視界がしだいに涙でぼやけてくる。でも太一の瞳から目を離すこと
はない。

「ねっ 未来が思うように生きればいいよ。もちろん、僕は僕がし
たいように生きる。」

溢れ出した涙が頬をつたう。

「ただ、未来の隣にいつも僕がいるっていう人生だといいいんだけど。
」

「まるでプロポーズみたいね。」
と私は涙ながらに言う。

「もちろん私は、太一とずっと一緒にいる人生がいい。」

流れる涙を太一が優しく拭いてくれ、太一がそっと私の唇に自分の
唇を重ねる。

初めてのキス。

太一の腕が私の背中に回され、ぎゅっと抱きしめる。
とまどいつつ私も太一の背中に腕を回す。

「本当は、このまま続けたい気分だけど、未来の体調がよくないし、我慢する。」

何度目かのキスを交わしたあと、太一はそう言った。

「えっ!？」

私が固まっていると、

「僕も健全・・・ではないけれど、21歳の普通の男の子だから。」
といじけてみせる。

そんな太一の顔を見たらなんだがおかしくって、笑ってしまった。
つられて太一も笑った。

その後、2人で1つのベッドに抱き合って朝を迎えた。

「夢を見た空」

初めての旅行・初めてのキスの後、

私と太一はこれまで以上に一緒にいるようになり、いつしか病院中の公認の中になっていた。

病院内もちろん、外出願いを出して、街も私たちのデート場所になった。

映画を見たり、水族館や博物館に行ったり、高原の夜の続きも・・・さすがにその日は、病院に帰ってきたとき浩美さんをはじめとした看護師の人たちに
気付かれるのではとヒヤヒヤした。

入院生活の中で普通の恋人のように過ごせることがとてもうれしく、デートを満喫していた。

そんなある日、街でのデートの帰りに病院の近くに、大きなジャングルジムの在る公園を見つけた。夜には、絶好の天体観測の場所だと気付き、

いつしか 夜は病院を向け出しこの公園にくるようになった。

ジャングルジムに登って、並んで空を見た。

「私ね。小さい時、歌手になりたいって思っていたんだ」

公園の銀杏の葉が夜風に舞う。

この公園だけ、時が止まっているように思える。

「歌手って歌を歌うあの歌手だね？ マジで?！」

太一が驚いて私の顔を見る。

「こう見えてピアノはプロ級よ。兄が最初ピアノ習いはじめて、私もマネして習い出したの、入院やらでまともに習い事できなかったけれど、兄が教えてくれたし、自分でも勉強して、いまじゃ私の方

が上だった兄が言うくらいまいよ」

私は、エアピアノを弾くように空中で指を動かしてみせる。

「最近、このまま生きつづけることができたなら、兄みたいに歌手になりたって本気で思うようになったんだ」
空の星を見上げてつぶやく。

「歌ってさ、時代を超えて残るじゃん ビートルズのジョン・レノンとかの唄は、彼が死んだ後に生まれた私だった知っているんだよね、なんかそういうのいいなって思って」

太一が何かを悟ったような顔をする。

「星の光の話を聞いて、私がいなくなった世界に私の作った歌。私が歌った歌がずっと残り、みんなが私のことを覚えていてくれる。そういうのっていいなって そんな歌手って一握りだろうけれど・・・」

「バカにされるかと思ったら、太一はちゃんと最後まで話を聞いてくれた。」

「いい考えと思うよ ちょっと叶えるのは大変と思うけど、夢はでっかくないと！ 僕でできることがあれば応援させてね。」

太一は思いついたように

「じゃあ 僕は未来の専属マネジャーやる どうかかな？」
そういつてニコッと笑う。

「本当にそんな日がくるといいね」

2人でまだ見ぬ将来の話で花を咲かせた。

「涙のクリスマス」

その時は、何の前触れもなく訪れた。

クリスマスを目前にした12月半ば、

もう外は寒くなってきたので、このところはもっぱら病室で過ごすようになった。

その日は、1週間後にある小児科のクリスマス会の飾り作成の手伝いで

私の病室で太一と2人、折り紙と格闘していた。

「こういう飾りって何年だったもの作られるんだね」

太一は、細長く切った折り紙を輪っかにして繋げていく飾り作り、私は折り紙の教本とにらめっこしつつ、サンタやトナカイを折る。

「クリスマス会の時ってどんな曲弾くの？」

部屋の隅にあるキーボードを指指して太一が聞いた。

私は、その腕前をかわれ毎年クルスマス会は、子どもたちが歌う時のピアノ伴奏をしている。

「定番の『ジングルベル』『きよしこの夜』とか。あとジジョン・レノンの『パッピークリスマス』を歌うの。私がジョン・レノンのパートで子どもたちがコーラス。あと私1人で1曲歌って欲しいって言われて・・・」

今までのクリスマス会はひたすら伴奏役に徹していたが、今年は私の弾き語りをやって欲しいという小児科ナースのみなさまの依頼があり、始めて人前で弾き語りをする。

「始めて人前で弾き語りなんてするかたちちょっと緊張。」

弾き語りという言葉に驚いて太一が目を見開く。

「へえ 弾き語りか 僕も聞きたいな。 将来大物歌手になるはず？の未来の初舞台だ」

【大物歌手】の部分をあえて強調して言う太一に

「茶化さないの!!」

と抗議する。

「冗談はいいとして、1曲僕からリクエストいい?」

申し訳ないような表情で遠慮がちに言う。

「いいよ。どのクリスマスソングがいい?」

私はベットサイドの棚からクリスマス曲集を出す。

「いや、未来のオリジナル曲を」

「えっ!?!」

バサッ

あまりの衝撃で手に持っていた曲集の本を落としてしまった

「当然自作の曲はあるでしょう?それが聞きたい。クリスマス会じやなくて、2人っきりの時に僕だけに歌ってほしいなあって・・・」

ちよつと照れたように言う太一がなんだか愛しく感じる。

「えゝっ どうしようかな?」

とわざと焦らすと

「そこをなんとか」

と太一が頭を下げたので、いじめるのをやめて、

「特別だよ」

と承諾する。

「ありがとう」

そして、静かにキスをする。

お互いの唇が離れた時に ノックの音がして浩美さんが入ってきた。

「2人とも ラブラブのはわかるけれど昼食の時間よ」

別にキスの瞬間を見られたわけではないが 私たち赤面してしまう。

「ほほほんとだ お昼食へに行こう」

動揺を隠し切れずに変な声になる。

慌てて折り紙をかたづけて、カーディガンを羽織、浩美さんに促されて病室に出る。

食堂に向かいながら、

「未来は、お昼から彩ちゃんところに行くんだよね?」

ギリ

「う うん ちょっと用があってね。」

浩美さんが後ろでクスッと笑っているのが聞こえる。

彩ちゃんとは、14才の女の子でちょっと前に入院してきた子だ。

クリスマスに彼氏に手編みのマスラー渡したいということで、

私も太一へのプレゼントにと一緒に編んでいる

もちろんそのことは太一には内緒だから 怪しまれないようにしているが、

「彩ちゃん ピアノ弾きたいんだって、で、未来ちゃんが教えてあげているのよねえ」

事情を知る浩美さんが助け船を出してくれたので、それに乗っかり

「そう、譜面の読み方とかも教えているの」

あとで、彩ちゃんに口裏を合わせてもらわないといけないと考えつつ

話を誤魔化した。

午後、彩ちゃんと一緒に編物をして、自分の病室に戻り

キーボードにベツトポンを付けて、太一にお願いされた、オリジナルの曲の弾いていると

浩美さんが慌てて扉を開けて入って来るのが目の隅に見えた。

「未来ちゃん いた!!」

「どうしたんですか?そんなに慌てて」

ヘットポンを耳から外しながら聞く

「あのね。 た た 太一 太一くんが・・・」

「? 太一がどうしたんですか?」

浩美さんの慌てようとは反対にのんびり聞き返す。

私ののんびりさにちょっと落ち着いた浩美さんが 私の肩に手をおいて

「落ち着いて聞いてね。・・・太一くんが・・・発作を起こして倒れて・・・意識不明なの」

「？」

（ホッサヲオコシテイシキフメイ）・・・

「意識不明！！」

その言葉を理解するまで時間がかかった。

「浩美さん どういうことですか？ さっきまで普通にしていたじゃないですか？」

浩美さんの腕を掴み激しく揺らす。

「私も詳しいことは知らないけれど、病室で発作を起こしたようで、」

いてもたってもいられず、太一の病室へむかったベッドの上で酸素マスクを付けられて横たわっている太一は、まるで別人のように青白く生気が感じられなかった。

私はベットサイドのイスに腰をかえ、そっと太一の手を触る。ちょうど担当医の吉村医師が病室に入ってきた。

浩美さんが呼んでくれたのかもしれない。

「先生 太一はどうしたんですか？」

私は太一に目をむけたまま横に立つ吉村医師に聞いた。

「うーん そうだね」

なんだか言いにくそうに口籠もる

「覚悟できています、はっきり言ってください。」

今度は、吉村医師を見上げ、目を見て言う。

「実は、中村くんは未来ちゃんよりも危険な状態で・・・」

「えっ」

お互いはっきりと自分の病氣のことを話してなかった。

というか現実を受け止めることが怖くて、どちらともなく目を背けてきた。

普段太一が病氣ということを微塵も感じさせないので、

私より重い症状とは想像もしなかった。

「中村くんは、君を心配させてたくないから黙っていて欲しいって言ってたんだが、『次大きな発作を起こしたら最後』と覚悟してお

くように彼に言っていたんだ。」

そういう吉村医師の表情も辛そうだった。

「・・・ウソっ」

倒れそうになった私を支えながら吉村医師が続けた。

「今は落ち着いているけれど、いつ目を覚めますがは、残念ながらわからない。」

ちょうど太一のご両親が病室に入ってきた。

私はお辞儀をして 後ろ髪を引かれる思いで病室を後にした。

それからのことはあまり記憶にない。

遠くで浩美さんの声が聞こえている夢なのか？現実なのか？

気付くと、ご飯の乗ったトレイを持った浩美さんが入口に立っていた。

「いつからそうしていたの!？」

浩美さんは入口近くにある照明ボタンを押しながら言った

私は、外が暗くなっていることにも気付かずに、何時間もベッドに腰をかけていた。

「ああ 浩美さんか。もう夕ご飯の時間？」

私は抑揚ない口調で聞いた

「もう 当の昔にご飯時間は終わっているわよ。 帰る前に未来ちゃんの様子を見ようとさっきちよつと覗いたのよ。 ご飯も食べてないみたいだったから 配膳をもらってきたわよ」

そう言って、ベッドサイドの机の上に食事を置いてくれる。

「ありがとう。でも今は食べる気がしないから下げて。せっかく持ってきてもらったのにごねんなさい。」

そう言ってベッドに横になろうとした私の腕を掴み。

「だめよ!! ちゃんと食べてなさい!! 未来ちゃんまで倒れることになるわよ」

浩美さんが強い口調で言った。

「無理してで食べなさい。」

浩美さんは、スプーンで救ったスープを私の口元に持ってきた。
パクッ

私がスープを口に入れては、浩美さんがまたスープをすくって私の口元に持ってくる。

そうそれを数回繰り返した後

「そう、いい子ね。じゃあとは、自分で食べられるね」

持っていたスプーンを私に持たせて、私が食べ出すのを待っている。
私はそのまま大人しく夕ご飯を食べられるだけ食べた。

「これだけ食べたらもう大丈夫だね。じゃああとはもう寝なさい。」

「・・・えっ」

「寝られなくても、ベッドに横になるだけでもいいから ほらっ」
無理やり浩美さんが私を横にしてふとんをかけてくれる。

「太一君は大丈夫よ。信じてあなたは、待ってなさいね。」

私の頭をなでて博美さんは病室を出て行った。

1週間が経過してクリスマス会の日になった。

1度も太一の意識は戻らないまま。

私は太一のいないクリスマス会に参加した。

クリスマス会が終了したあと、太一の病室にキーボードをこっそり持ち込んだ。

眠り続ける太一の枕元に手編みのマフラーを置き。

約束の弾き語りをした。

意識のない人に歌っても意味がないような気もしたが、もうクリスマスと一緒に過ごせることはないような気がして、夜勤の浩美さんに許可をもらって太一の病室でライブをすることにした。

キーボードのボリュームを小さくして、クリスマスの曲と私のオリジナル曲を歌った。

歌い終えて、太一の顔を見ていると　ふと昔見た映画の曲を思い出した。

看護士志望の少女と不治の病に犯された少年のひと夏の愛の物語、ラストその少年は死んでしまう悲しい物語。

なぜかその映画の主題歌が頭に浮かび、思いつくままに歌った。

「その歌を・・・ここで・・・歌うのって・・・ちょっと・・・縁起・・・よくないよ・・・」

歌い終わった時、力ない声が聞こえた。

「!？」

「なんで・・・その選曲？」

さつきよりはちよつと大きな声が聞こえた。

まさか!？

おそろおそろ太一のベッドに目をやると

口元の酸素マスクをはずして太一が首を上げていた。

「太一!!」

私がベッド傍に行くと太一はかすかに笑った。

「太一・・・」

私みるみる涙があふれてきた。

「ぶっ　変な顔」

涙をこらえている私の顔を見て太一がふき出す

「何よ!　どんなだけ心配したと思っているの!!」

私は泣きながら抗議する

「ごめん。でもあの曲はひどくない?　僕死んでないし・・・」

私の涙を太一がぬぐいながら言った。

「だった・・・ごめんなさい・・・　でも1週間も意識不明だった人がよくいうよ!!」

私のほほにある太一の手を握り、今太一がここにいることを確かめながら反論した。

「えっ 1週間も眠っていたの？ って今日は何日？」

壁にかかっているカレンダーに目をやった

「今日は24日 クリスマスイヴだよ。」

1週間も経過していた事実にはさすがの太一も衝撃を受けたようだった。

「そっか・・・今日はイヴか・・・」

聞こえない程度の小声で太一が呟く。

「と とりあえず、浩美さん呼んでくるね。」

私はまだブツブツ呟いている太一を残しえ、ナースステーションに行き、

浩美さんに太一が目を覚ましたことを知らせた。

もう少し太一と一緒にいたかったが、浩美さんに睨まれて、病室に帰った。

その夜は久しぶりに穏やかに眠ることができた。

「誓いのペンダント」

太一の奇跡（？）の目覚めは瞬く間に病棟内に広まった。

太一はもともと病棟のアイドルだったうえに、私が歌っている時に目覚めてという演出（？）付きのためかみんながおもしろおかしく広めていた。

私が太一の病室で歌っていたことを知っているのは浩美さんだけだったから、最初に広めたのは確実に浩美さんだと思う。

「眠り姫ならぬ、眠り王子は、姫君の愛のこもった歌声で目を覚ました」

最終的にはこんな言われようになってしまった。

目立つことに慣れてない私は恥ずかしくて、こそそと太一の病室に行くようになった。

「今日は、天気もいいし、外に行こうよ」

正月まであと数日にせまった年の瀬の午後、太一が散歩を催促してきた。

「外って屋上？」

人目を避けたい私は、比較的人の少ない屋上を提案したが、

「中庭の花壇がいい。」

とあっさり拒否された。

「え・・・」

洩る私に太一が手を合わせえてお願いポーズを取る。

「わかりました・・・でも外は寒いから暖かくして出ること！あとまだ体力が戻ってないから車イスね。」

「平気だ」

と言い張る太一を無理やり車イスに寄せ、中庭の花壇に向かう。お正月に自宅に一時帰宅する人やその家族の人にすれ違った。

みんなニコヤニコして私たちを見ている。

（浩美さんのバカ）

私は恥ずかしさと怒りで太一の座る車イスを力強く押して歩いた。

中庭のベンチ横に車イスをつけて、私はベンチに座った。

風はちよつと冷たかったが、日差しが暖かく降り注いでいた。

「未来」

太一は改まったように私を呼んだ。

「うん？」

私は太一の方に顔を向ける。

「目つぶって」

太一は前を見たまま言う。

「？ 何で？ 何？」

警戒して聞き返す、

「いいから 目つぶって！！」

ちよつと強い口調で太一が言う。

「何より はい つぶりました。」

私は言われた通りに目をつぶった。

次の瞬間 ひざの上に何かが置かれた。

「！？」

驚いて目を開けると、ひざの上に白リボンのついた某有名ブランド店の小さな緑色の箱があった。

「ええっ！？」

その箱を持ち上げて、太一を見ると

「遅くなったけれど、クリスマスプレゼント あと、これありがとう」

そう言って、太一はコート下にこっそり手編みのマフラーを巻いていた。

「あっ それ」

まだ太一の意識が戻ってない時に私が枕もとに置いたクリスマスプレゼントだった。

「これ未来からでしょ？　ありがとう　すごくあったかいよ。」

太一が目覚めて事と、あの噂とですっかり忘れていた。

「生まれて始めて編んだからきれいに仕上がってないか申し訳ない。」

「ううん　すごく未来の愛を感じるよ。　ありがとう」

気付いてくれたことが嬉しくで照れてします。

「これ　開けていい？」

小さな箱を持ち上げて聞く。

「もちろん」

かかっているリボンを丁寧ほどき、箱を開けると　中にはペンダントが入っていた

「これ　かわいい」

箱から出して見ると、そのペンダントはちょっと変わったクロスのデザインだった。

「これちょっと変わった形をしているね。」

まじまじ見ている私の手から太一はペンダントを取って

「雑誌で見つけて、未来に絶対これを渡したいって思ったんだ　アキシデントで渡すのが遅れたけれど　受け取ってくれる？」

「もちろん　ありがとう　嬉しい。」

太一は私の首にペンダントをつけてくれた。

「ありがとう　大切にするね」

見つめあった私たちは軽いキスをした。

年が明け　しばらくたって1月中旬のある日

検温に来ていた浩美さんが、私の首にあるペンダントを見て

「あっ　これってあのブランドのだね？」

と言った。

「うん そうだよ さすが！ 浩美さん よくわかったね！」

「太一くんからでしょう？　へえ これを選んだんだ 太一くんもにくいことするね」

浩美さんが意味深な発言をしたのが気になり。

「どういうこと？」

聞きかえず私に

「もしかして知らないの！？　知らないで付けている？」

浩美さんは呆れたような顔をして言う。

「しょうがない、お姉さんが教えてあげましょう。」

と浩美さんがちよつと偉そうに言う。

「これって正面からはクロスの形に見えるけれど、横から見えてみて 浩美さんに促され、首からペンダントをはずして横から見ると？」

さっぱりわからないという顔をしている私に

「横から見ると 『無限大』 のマークになるでしょう？」

と指で『^{むげんだい}∞』のマークを書いた。

「このペンダントは、『永遠の愛』 っていう意味が込められている っつて雑誌に書いてあったの」

「へえ 『^{むげんだい}∞』のマークで『永遠の愛』かあ。」

浩美さんにつられて私も指で『∞』マークをなぞる。

「そっ！！ 『永遠の愛』よ 太一くんもロマンチストねえ」

浩美さんが目を細めて私を見る。

「永遠の愛・・・！？」

太一の込めた思いに気付く 急に赤面する私に

「今気付いたの！？　未来ちゃんにぶい。 太一くんからのプロポーズじゃない。いいわねえ 今さら照れない 照れない 大切にしなさいね。」

と私の頭をポンポンとなでた、

「でも なんて太一くん、意味を教え・・・」

と言いかけて浩美さん口をつぐみ ナースに顔に戻り

「おっと いけない 次行かないと。じゃあね。」
と病室を出て行った。

浩美さんが口を閉ざした言葉の続きを私はわかった・

「でも なんて太一くん、意味を教えなかったのか？」

そして、太一が意味を教えてなかったこと理由も理解した。

私たちの間では「プロポーズ」はできない。ということ。

きっと太一は、言葉には出せない『永遠の愛』をこのペンダントに
込めたのだ。

私たちの人生は綱渡りのように細い綱の上を歩いている。

いったどり着くとも知れない 底も見えない綱を渡っている。

太一の思いが胸に染み渡り 私は声押し殺して泣いた。

「星の光」

最後の時はあっという間に訪れた。

3月になり花壇の花々が咲き始めた頃

太一はまた意識不明になり、そのまま眠るように逝った。
病室の外で待っていた私に

「最後に中村くんとお別れしておいで」

と吉村医師がナース達を外に出るよう指示をしてくれた。

ベッドの上の太一はまるで眠っているようだった。

今にも目を開けて

「未来」

と優しく名前を呼んでくれそうだった、

私は太一の手を握り動けなかった。

「これ太一くんから未来ちゃんにとって預かっていたの、もしものは渡してほしいって」

太一との最後のお別れのあと、浩美さんは、1通の封筒を私に差し出す。

「こんなに早く渡す時が来てしまうなんて」

1度の発作の後に、太一が浩美さんに託していたという。

「読むか読まないかは未来ちゃんの手で自由だけど、太一君の最後の言葉だからちゃんと聞いてあげて。」

そう言って浩美さんは去っていった。

受け取った封筒には確かに太一の字で「須藤未来様へ 中村太一」と書かれてあった。

「太一」の字をそつと指でなぞる。文字なのに愛しさが込み上げてくる。

そつと封筒をあけ中の手紙を取り出す。

窓の外は、穏やかな春の日差しが降り注いでいた。

「D a e r 未来

この手紙が未来に届いた時、僕はもう未来の側にいない時だろうね。

ごめんね。未来を置いて行ってしまつて。

僕を残していくのが嫌だからって、

付き合うのをためらっていた未来なのに、

逆に僕が先に行ってしまうなんて。本当にごめんね。

でも、どうか泣かないでほしい。未来を泣かせるのは辛い。

僕は今とても幸せだよ。

いつ死ぬともしれない人生の中で未来に出会えたことは幸運だった。

未来に出会い、恋をして、人を愛することを知って僕の人生は最高だった。

あのクリスマスプレゼントには実は意味があったんだ。

あえて言わなかったけれど、あのペンダントには『永遠の愛』がモチーフになっているんだ。

僕の未来への『永遠の愛』それが僕のすべてだから。

僕がいなくなった後、ペンダントは捨ててくれてかまわない。だって未来にはこれからたくさんのお会いが待っている。

僕のように未来に出会って、幸運に思える人がきつという。

だから、どうか僕のことは忘れて、その人のために生きてほしい。それが僕の最後のお願いです。

でも、1つわがままを言わせて、

未来が天命をまっとうし、天に召される時は僕が迎えに行くから。そのときは未来の最高の笑顔で僕を出迎えてね。

そして、未来が歩んできた時を、

僕が経験できなかった人生をたくさん話してね。

僕はそれを楽しみに待っている、」

太一からの最後のラブレターは、弱々しい字だが、力強い心のもった文面だった。

涙で目の前がかすむ。

手紙の最後には、太一が縁起悪いと言ったあの映画の曲の詩で締めくくられていた。

『流れてく時の中で、運命が引き離しても
めぐり逢えると 愛し合えると 信じていたい』

あれから 数年が過ぎた、
いつ止まるともしれない私の心臓は、奇跡的にも普通の生活がおくれるまで回復している

私は歌手になる夢をかなえるため、兄のもとで勉強中。

今では、たくさんの人と出会い、その出会った人たちとの共通の時間を過ごすようになった。

人と関わるのを避けていたあの頃が嘘のそうだと、会う度に浩美さんにかかわれる。

太一は、「自分のことは忘れて」と最後の手紙に書いていたけれど、あの高原で話した星の光のように、私は太一のことをずっと忘れない。

太一からの『永遠の愛』と共に生きていく。
私が忘れない限り、太一は存在しつづける。

あと何年こうして生きていられるかはわからない。たとえ残りわずかな時間だとしても、

太一に再会するその時までには、全力で生きようと思う。

胸を張って、「いい人生だったよ」と最高の笑顔で言えるように。
めいっぱい生きよう。

太一と2人で見たあの頃と変わらぬ夜空に誓う。

「星の光」
(後書き)

引用楽曲 東野純直 「確かに愛したとき」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6257p/>

プラネタリウム

2011年1月15日10時28分発行